

2015(平成27)年7月発行

都歴研

友の会だより 9号

都歴研友の会事務局 〒191-0033 東京都日野市百草971-158 増田方

電話・FAX 042-591-1853 ホームページ <http://sky.geocities.jp/torekikentomonokai>



ラマンチャ地方の風車

友の会企画 ■ スペイン研修旅行の記

歴史のミルフィーユを訪ねて

矢島恒之

イスタンブールを經由して

12月1日(月):成田

出発ロビーに定刻の8時25分に集まったとき、同行添乗員の佐々木さんから、改めて、搭乗予定のルフトハンザ航空がストライキで使えないため、利用できる便を探しているとの話があった。

代替便はトルコ航空で、出発予定は12時25分となった。乗り継ぎ空港もフランクフルトからイスタンブールに代わった。搭乗口集合は12時15分である。

トルコ航空機内は満席であったが、皆、とにかく出発できることを喜んでいる。

順調な飛行が続き、予定より

少し早く、「間もなく到着」の放送がはいる。イスタンブールにむけ降下中に、ボスポラス海峡や橋が見えたとの声が聞こえた。

イスタンブール空港で2時間の待ち時間である。しばらくウインドショッピングをしながら座れる場所を探す、大勢の人であふれかえり、なかなか見つからない。ウインドショッピング中、ブルカ(目の周囲を出しているスカーフ)はニカブ、

主な紙面

友の会研修旅行	歴史のミルフィーユを訪ねて(矢島)	1
	夢のような一週間(豊田)	6
研究大会等報告	全歴研大阪大会/関歴研・都歴研講演会/史跡見学	11
投 稿	ウズベキスタン紀行(増田) 20 / モザイクの町ラ ヴェンナへ(村木) 24 / 被災地訪問の旅(豊田)	29
会員の著書紹介	『日本の研究博物館・資料館』(多田) / 『梧山堂雑書』(重政)	30
友の会史跡見学	台密と東密の歴史、湖北の風土と惣村(案内人小澤)	31
友の会総会報告	32 「友の会歴史教育研究助成制度」のご案内	23

頭髪だけを覆い顔を見せるスカーフをヘジャブと呼ぶそうである)の女性や、アラブ民族衣装の男性などと出会い、イスラム教圏に来たことを実感した。

バルセロナへの乗り継ぎ便も満席だった。

やっとバルセロナに着いたのは、スペイン時間の23時40分。機内預けの荷物が出てこない人がいたため、添乗員さんが一緒に空港事務所に行き、紛失の手続きをした。紛失した荷物はイスタンブールにあるとのことで、明日夜には到着と回答があった。(実際に手許に届いたのは、旅行が殆ど終わる12月5日であった)

スペイン時間で夜中の1時25分に、やっとホテルに到着できた。成田集合から25時間目である。

サグラダ・ファミリアは工事中

12月2日(火):バルセロナ

昨夜はあまり眠ってはいなかったのに、皆さん、けっこう早起きをして、食堂にやって来た。

最初の見学地はサグラダ・ファミリア(聖家族教会)で、バスの車窓から見えるバルセロナについて説明を聞きながら向かった。

バスは、サグラダ・ファミリアから少し離れた所で停まり、建物の全景が見える公園まで徒歩で移動した。この公園で写真を撮りあっていたとき、

メンバーの一人が二人組の泥棒にバッグを盗まれた。

幸いパスポートや財布は無事であったが、警察に連絡し、被害を受けた方と添乗員さんで、警察などに行き、帰国後の処理に必要な手続きをした。

残った私たちは、現地ガイドさんの引率でサグラダ・ファミリア(聖家族教会)を見学した。公園で池越しに見えていた「生誕のフ

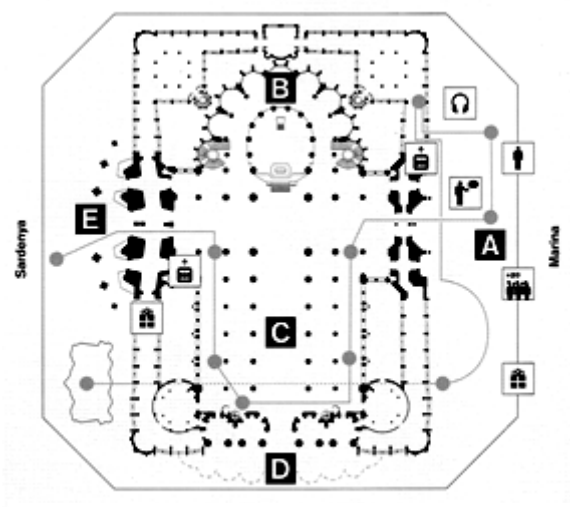


イエスの「愛徳」の門

ァサード」(内部図のA)からの入場である。

「生誕のファサード」は、ガウディが、後に続く建築者に『手本』を残すために、ゴシック様式の伝統を取り入れ、三つの門で構成したという、世界遺産になっている部分である。

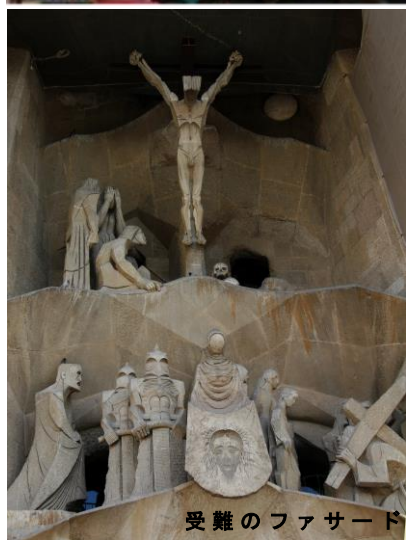
この「生誕のファサード」の三つの門は、聖家族を構成するイエス、聖父、聖母に捧げられ、彫刻は、イエスの誕生から最初の説教を行うまでの場面が表されている。ことに中央の「イエスの門」には、イエスの生誕にまつわるさまざまな場面で隙間なくおおわれ、メシアの到来をたたえる純朴な雰囲気を作っている。なお、このファサードの彫刻では、日本人彫刻家の外尾悦郎さんも大き



サグラダファミリア内部図



聖壇の天蓋とイエスの十字架



受難のファサード

ようである。

前任者ビリャルの後を引き継いだガウディは、既に地下礼拝堂の工事が進んでいたので平面設計では大きな変更を加えなかった。しかし、立面設計は大きく変更した。枝分かれした柱とヴォールトの形状変更で高い天井を支持させたのである。

周りより高くなった中央祭壇（聖壇）（内部図のB）の天蓋には、イエスの十字架が下げられ、聖体を象徴するブドウやムギのモチーフで飾られている。

聖壇の反対の端（内部図のD）は、「栄光のファサード」である。完成すれば教会の正面入口になるところで、中央の扉口にはキリスト教の代表的な祈り文「主の祈り」の全文が刻まれることになっている。「主の祈り」は、さまざまな国の言葉で記され、日本語で記された部分もあった。

「生誕のファサード」の反対側の翼廊に「受難のファサード」がある（内部図のE）。ここには、最後の晩餐やイエスが十字架にかけられ、昇天す

な役割を果たしている。

内部は美しいステンドグラスや天窓からの採光で、自然界の樹木や木漏れ日の差し込むような雰囲気を持たせ、祈りを捧げたり瞑想を行うにふさわしい。高い天井を支える柱は、森の樹木を擬した形に作られ、天井近くは、樹木が枝分かれをした

るシーンなどが、直線的彫刻によって表され、「生誕のファサード」とはまったく違った印象を与えている。入口の床にも、イエスの受難にかかわる絵が描かれていた。

地下には、地下礼拝堂と資料室や建築作業室がある。最初に建設された地下礼拝堂は、1930年から教区教会として機能している。資料室には、建築にかかわる資料が多数展示されており、作業室では大勢の技術者が働いていた。

集合時間には、警察に行っていた被害者さんと添乗員さんも戻ってこられ、そろって昼食に行くことができた。

レストランに行く途中で、ガウディの作品のカサ・ミラなどを見た。カサ・ミラの1部屋の専有面積は300～400㎡もあるという。

ピカソの画風をたどる美術館

午後のメインは、ピカソ美術館。14世紀ごろの貴族の館が多く残るモンカダ通りにある。ピカソ美術館も貴族の館を改装した建物で、小さな小道が迷路のように入り込んだ奥にあった。人気の美術館で、私たちのグループは2時の入館と指定されていた。ここには、ピカソの幼少期から青年期の初期の作品が展示されている。これらの作品の中に「青の時代」と称される、ピカソの若いころの作品が展示されている。当時のピカソは、孤独で憂鬱な心象を、青を基調として表現していた。ピカソの画風について、その後のキュビズムにいたる移り変わりがわかり、おもしろかった。

今日の最後は、バレンシアに向かってのバス移動である。途中で、「悪魔の橋」と異名をもつラス・ファレラス水道橋を間近で見学した。

バレンシア到着後、レストランで夕食を食べる。デザートのカキがおいしかったことが印象に残っている。



天井付近の柱の様子

12月3日(水)：バレンシア→グラナダ

今日は、朝からグラナダに向けてひたすらバスで移動である。昼食は、高速道路際のレストランである。スペインの交通法規で、長時間運転の際の運転手さんの休憩時間は、しっかり守られている。全員が集合し終わっても、休憩時間が終わるまではバスはエンジンをかけない。

この高速道路での移動の時、牛の姿だけの看板が目についた。添乗員さんの説明によると、高速道路周辺では文字による広告が禁止されているとのことであった。

私は、日本の高速道路（首都高速では周りのビルの看板・広告が目に入る）でも宣伝広告の看板を見た覚えがない（高速道路際の建物の会社名などは見た）。日本も高速道路周辺の広告は禁止されているのかもしれない。

アルハンブラ宮殿

やっとグラナダに着いたときには、夕方になっていた。午後4時から、アルハンブラ宮殿の見学である。

駐車場でバスを降り、しばらく歩いて行くと「車輪の門」がある。その少し先には「裁きの門」があり、こちらが正門である。「車輪の門」は、「カルロス5世の宮殿」を建設する際、荷馬車を通すために城壁に穴を開けた跡である。正門の「裁きの門」には、はじめから外側の門扉がなく、内扉のところまで続くカギの手折れの4つの空間が防御の役割を果す構造である。

「車輪の門」から入ると、目の前に16世紀に建てられた「カルロス5世の宮殿」が建っている。神聖ローマ皇帝カール5世は、スペイン王としてはカルロス1世とよばれるのだが、スペインでは、カルロス5世とも呼んでいるらしい。

「カルロス5世の宮殿」前広場の反対側に建つ「ワインの門」からアルハンブラ宮殿に向かう。

「ワインの門」の正面にあるアルカサーバと呼ばれる最古の城塞は見学せず、庭伝いにナスル朝宮殿の入口に向かった。アルハンブラ宮殿は、「カルロス5世の宮殿」などの新王宮と区別するため、



旧王宮と呼ばれたという。旧王宮は、メスアール宮、コマレス宮、ライオン宮とそれぞれの付随施設からなっている。

最初に見学するのは、メスアール宮。狭い入口から入ったところが「メスアールの間」で、現存する旧王宮の

なかでは、最も古い部分だという。ナスル朝時代には、ここで裁判が行われた。キリスト教徒の征服後は、ここに礼拝堂が置かれ、部屋のように大きく変わってしまった。しかしこの部屋は今でも豪華で、装飾された天井や柱頭、壁のタイルなどが印象に強く残った。

「メスアールの間」の奥に、祈祷室がある。キリスト教徒が「メスアールの間」を礼拝堂として使っていたときには、聖具室としていた。この祈祷室の右手に、装飾のついた小さなくぼみ——ミヒラブがある。イスラーム教の祈りで必要なメッカを指す、くぼみである。

「メスアールの間」からの出口を通ると、「黄金の間」に抜ける。この部屋の本組みの天井に金箔が使われていることからついた名である。ナスル朝時代はこの部屋は、王宮に入る許可が下りるのを待つ場所であったらしい。この「黄金の間」の外側、柱廊の外が「メスアールの中庭」。この小さな中庭の南側に、「コマレス宮」のファサードの二つの扉がある。右側の扉に入ると王宮の外





大使の間

に出て
しま
う。ガ
イドさ
んは、
「イス
ラム教
の故郷
の砂漠

では、方向音痴の人は生きていけない。王宮に入るために、正しい方向感覚を身につけた人かどうか試していた」と言う。

今はいつも開いている左の扉を入ると、「アラヤネスの中庭」と呼ばれる美しい中庭に出られる。この中庭と池は写真でよく見ていたが、本当に水鏡の美しい中庭である。この中庭の床は、白い大理石でできている。この白い床と池の水鏡を利用して中庭をより広く見せている。

池の対岸にある柱廊（南側柱廊）の柱は、まるで水の上に立っているように見える。

この「アラヤネスの中庭」という名前は、池の両側に植えられている灌木の生け垣に由来する。この木は、アラヤネス（別名はマートル（銀梅花））と呼ばれ、当時、アンダルス地方で盛んに園芸で使われていた。5月から6月頃に、芳香があるかわいいう白い花を枝先に開花させる常緑低木の花木で、ハーブとしても、葉の芳香が利用される。秋に黒っぽく熟す果実も芳香と甘みがあり食べることができるなど、有用な庭木とのことである。

「メスアールの中庭」から「アラヤネスの中庭」に入ってすぐ左側にある細長い部屋が、「バルカ

の間」で、隣の「大使の間」と呼ばれる玉座の間への通路となっている。「バルカの間」の両側には、高いアーチで区切られたアルコーブがあり、西側のアルコーブには水洗トイレも備わっている。

「大使の間」（コマレスの間とも呼ばれる）北側の中央壁龕が玉座で、この部屋の入口のアーチには、今も金箔が残っている。圧倒されるのは、天井にまで施されたモザイクで、洗練されかつ豪華で、イスラム王朝の権力の象徴が凝縮されている。中でも天井は、ナスル王朝の木工技術の粋を集めたものである。この部屋の窓は、ステンドグラスで装飾され、壁龕の中にも色が満ちあふれ、遊牧のテントの中のようなであったという。砂漠のテントでは、要人たちは必ず隅に座ったので、玉座も壁龕に置かれた。玉座は、来訪者からは逆光の位置になり、来訪者は、シルエットからの視線に威嚇されるようになっていた。この玉座によりかかると、グラナダの町と邸宅、そして「アラヤネスの中庭」の水鏡に写った空と水を、目線の高さで同時に楽しめたという。

この「大使の間」の天井のモザイクは、イスラム教の教えにある7つの天界を表現している。預言者ムハンマドは、大天使ガブリエルに伴われて天界に赴いた。イスラム教の教えでは、この7つの天界の頂きに宇宙と銀河を支える生命の樹の根が埋め込まれた天国がのっている。

「アラヤネスの中庭」から「ライオン宮」に抜ける。ここは、王宮の中のプライベートな住空間である。入口を入ると12頭のライオン像の噴水に出会う。ここが「ライオンの中庭」である。

12頭のライオン像の口から絶えず水を吐き出しているだけでなく、「ライオンの中庭」を臨む「諸王の間」、「二姉妹の間」や「アベンセラッヘスの間」など各部屋の中央にも噴水と池がある。これらの池から「ライオンの中庭」に細い流れが注いでいる。静かにしていれば水音も聞こえる。夏はひどく暑く、冬はひどく寒いグラナダである。アルハンブラ宮殿は、広い縁側と軒の工夫で冬暖かく、夏でも涼しく造られている。現在の空調の



効いた部屋よりも、ずっと爽やかで過ごしやすい。

「ライオンの中庭」を前にして、ガイドさんが強調したのは、イスラム世界では床に座ったり寝たりする生活様式だったことである。

イスラム世界が床に座った生活の場であったことを示すものは、「二姉妹の間」に隣接する「リンダラハのバルコニー」の窓の台の高さである。ナスル朝滅亡後は、アルハンブラ宮殿の多くが原形と変わってしまった。この窓の台は、変わらないものの例であり、変わったものの例が、このバルコニーから見える景色である。現在は、バルコニーの外には、回廊が見えている。この回廊は再征服後に増築されたもので、ナスル朝時代には、「リンダラハのバルコニー」から城壁越しに市街地が一望できていた。

アルハンブラ宮殿にはたくさんの浴場があった。なかでも「コマレス宮」と「二姉妹の間」の間にあって、「アラヤネスの中庭」の豊富な池の水を利用した「王の浴場」は、「大使の間」から続く、政治の場としても利用されたところである。イスラム世界では浴場は宗教的なお清めの場としてだけでなく、生活の中での重要な要素で、公衆浴場はモスクの次に大事な社会生活の場である。

「王の浴場」には、護衛兵たちの詰め所があり、浴場の休憩の場である「寝台の間」には、「楽士たちの回廊」とよばれるバルコニーがついている。この「寝台の間」で、「大使の間」で公的かつ儀礼的に扱った政治や外交の問題を、忌憚なく話し合ったという。

なお、イスラム教の戒律では、浴場に男女が一緒にはいることは禁じられている。「楽士たちの

回廊」で演奏した楽士は、皆、目が見えない者から選ばれていたという話は、信憑性がない。

「リンダラハのバルコニー」を抜けて、先ほど目にした回廊に出る。その途中に、カルロス1世と王妃イサベルの部屋、そして『アルハンブラ物語』の著者ワシントン・アービングの暮らした部屋がある。

回廊に出ると、眼下の「リンダラハの中庭」がよく見える。視線を変えると、「リンダラハのバルコニー」から見えたはずの市街地が眼下に広がっている。

回廊の先にある塔で階段を降り、上から見ていた「リンダラハの中庭」の脇を通って外に出たところが、「貴婦人の塔」の柱廊とそれを囲む庭園である。この一帯には、標高差のある地形を利用した小さなテラスと段々畑が広がっている。ここは、ナスル朝時代は、優美な邸宅や華麗な宮殿が建ち並ぶ空中庭園で、パルタルと呼ばれた。

パルタルからヘネラリーフェの離宮までの道には、たくさんの草木が植わっている。アルハンブラ宮殿のあるグラナダの地名は、ザクロの実という意味であると添乗員さんが説明してくれた。

ヘネラリーフェの離宮まで続く道を進むと、14世紀初期の建造物である「貴婦人の塔」をはじめ、城壁に並ぶ幾つもの塔が見える。城壁の内側には、騎馬隊が通れるほどの広さをもった内堀がある。

ヘネラリーフェの近くに「水の塔」がある。この塔は、アルハンブラ宮殿全体の用水路を守る重要な役割を持っていた。また「水の塔」の手



前に見えるのは、アラブ人のものとしては珍しい水道橋である。アルハンブラ宮殿への水の供給という戦略上重要な目的のために特に造ったものである。

「水の塔」と水道橋に並んでヘネラリーフェの離宮とアルハンブラ宮殿とを結ぶ出入口と橋がある。現代になってから造られた出入口である。橋を渡って少し行くと、イトスギの散歩道になる。

ヘネラリーフェの入口に野外劇場がある。この劇場は、1952年に造られたもので、グラナダ音楽祭の舞台になっている。野外劇場の客席の後ろから「下の庭園」（新庭園とも呼ばれる）が続いている。

この「下の庭園」は1951年に完成したもので、ナスル朝時代の面影は残っていない。しかし噴水や池の配置などに、イスラム式庭園の形が残されている。庭園の通路も、グラナダの石畳の伝統にそった様式である。

「下の庭園」を抜けると「降馬場の中庭」で、2つのアーチがある柱廊から入ると「次の中庭」である。簡素な作りであるが、奥にある門には警備兵の座る台もある。警備用に造られたカギの手折れの狭い階段を抜けると、「アセキアの中庭」に出る。いろいろ作り替えられていた中庭であるが、ナスル朝時代の遺構が発見され、当時の形に復元されたという。

ナポレオン軍をスペインから撃退したウェリントン公が、このヘネラリーフェにイングリッシュガーデンを造園した。イングリッシュガーデンは、今は、周りの森林に調和してそれほどの違和感



ない。ヘネラリーフェは、特に水を重視して造られたというのが、イングリッシュガーデンでも水は贅沢に使われていた。

アルハンブラ宮殿近くの象眼細工の土産物店で、スペインの伝統工芸と言われる象眼細工を見て、今日の日程は終わった。

12月4日(木)：セビリア

スペイン南部のアンダルシア間の移動ということで、今日の出発は9時である。おかげで、今朝は昨日よりもゆっくりできた。セビリアに着いたのは11時頃で、まず昼食をとった。

セビリア大聖堂とアルカサル

セビリア大聖堂はレストランの近くなので、徒歩で移動した。町には焼き栗の屋台があったり、市街電車や観光用馬車が通ったりして、目を楽しませてくれた。

セビリアは、ムワッヒド朝時代には副都として、イベリア半島支配の中心になった町である。その後のイスラム分裂時代にもセビリアを中心とした王国がつくられるなどしたことから、イスラム教の大モスクが建設された。このモスクは、キリスト教徒に征服された1248年、キリスト教の大聖堂として聖別された。大聖堂としては、15世紀に西側からゴシック様式で工事が行われ、16世紀には王立礼拝堂や主聖具室、参事会室などがルネサンス様式で、17世紀になるとバロック様式で小礼拝堂などが造られ、1928年に3つの大扉などが完成した。このような複合的様式の大聖堂であるが、一応、世界最大のゴシック式大聖

堂であると、渡されたパンフレットには書かれている。

ヒラルダの塔近くの入口から大聖堂に入ると、なかには豪壮な装飾で圧倒される。交差身廊の天井は、ゴシック様式のみごとな作りである。正面入口のサンクリストバル門の内側は、コロンブスの霊廟である。スペイン統一前の4つの王国の4人の国王がコロンブスの棺を担いでいる。

主祭壇は鉄格子の中で、黄金に塗られた巨大な木製衝立にイエスと聖母マリアの生涯が描かれている。その中央下部にはマリア像が置かれている。このアンダルシア地方では、マリア信仰が根強く、19世紀以降は、ローマ教皇にも認められた教義である。ルネサンス様式の主聖具室や参事会室は、スペインルネサンスの見事な花で、聖具室には、南米産の銀に裏付けられた銀製品や金製品を含む、たくさんの美術工芸品と言って良い聖具が置かれていた。

大聖堂内部は、両側の外壁に沿ってたくさんの



アルカサル の 入 口

礼拝堂が置かれている。そして主祭壇の後ろには、王室礼拝堂もある。

モスクのミナレット（尖塔）を改造したヒラルダの塔は、改造後は、大聖堂の鐘楼になっている。塔は、アラベスク模様の壁面をそのまま残し、ルネサンス様式のバルコニーとブロンズの女神像が上に付け足された。この塔の内部は螺旋状の坂道で階段ではない。イスラム教の時代には、祈りの時間を知らせるアザーンのたびに、ロバに乗って塔に昇っていたそうである。

大聖堂の後は、セビリアの旧ユダヤ人街であるサンタ・クルス街を見ながら、徒歩でスペイン王室の宮殿であるアルカサルに向かった。

アルカサルの入口前で、ここにまつわる歴史などの説明を受けた。アルカサルは、14世紀にカスティージャ王ペドロ1世が、イスラムの宮殿跡地に建設を始めたもので、イスラム時代の建物で現在残っているのは、この入口あたりと庭園の南西側の城壁だけである。ここは、幾つもの様式、が混ざった美しい宮殿である。ここでの説明のとき、日本に『アルカサルー王城ー』という、14世紀のスペインを舞台にした、実在のカスティージャ王ペドロ1世の活躍を描いた歴史漫画があるとの話を聞いた。なお、このペドロ1世は、王位を奪われることを心配して異母兄や罪もない多くの貴族を処刑したことから、「残忍王」として知られている。



セビリア大聖堂内部





インディアス古文書館

大聖堂界限での最後の見学は、インディアス古文書館。ここは、一般の観光客はまず来ないところである。

インディアス古文書館の建物としての起源は、フェリペ2世の命で建てられた商品取引所である。

現在保管されている史料は、コンキスタドールたちの初期のものから19世紀末にいたるまでの、手書きの文書などである。ここには、セルバンテスが公的なポストを要求した文書、1493年に新大陸におけるスペインとポルトガルの境界線を定めた教皇境界線（教皇子午線またはアレクサンデル6世の回勅と呼ばれる）や1494年のトルデシリャス条約、クリストファー・コロンブスの日記、アメリカ大陸の植民都市の地図の数々などが保管されている。もちろん植民地の機構全体の日常業務を記した文書類も多くある。歴史家にとっては、貴重な古文書館である。



イタリカ遺跡のトラヤヌス帝

バスで郊外のイタリカ遺跡に向かう。イタリカ遺跡は、ローマ帝国時代の都市遺跡で、ここから二人のローマ皇帝、ハドリアヌス帝とトラヤヌス帝が生まれた。

遺跡は、比較的良好に整備されていた。コロッセウム（円形闘技場）は、観客席の復元はたいしたことはないが、闘技場地下室や客席下の設備などもわかるように復元されていた。町並みの住居跡では、住宅の床を飾ったタイルや竈などを見学し、大浴場跡は少し高くつくられた見学場所から、全体像を見ることができた。小高い丘の上にはトラヤヌス帝の立像のレプリカが置いてあった。

セビリアのスペイン広場

本日最後の見学はセビリアのスペイン広場。日暮れ時にライトアップされた広場が美しかった。スペインには、「スペイン広場」と名付けられた広場はたくさんある。その中で、セビリアのスペイン広場が一番美しいと言われている。写真の建



スペイン広場

物は、1929年の博覧会で、スペインのパビリオンだったところである。現在は、州の議事堂として使われている。建物の広場側には、タイルでできたベンチがある。そのタイルは、スペイン各県の歴史が描かれている。私たちは、現地ガイ

ドさんの案内で、そのベンチを見て回った。

なお、この建物とスペイン広場の間には小川が流れていて、そこに4つの橋がかかっている。これらの橋は、スペイン統一前の4つの王国——カスティリヤ、レオン、アラゴン、ナバラの各王国を表している。

泊まったホテルのロビーには、クリスマスの飾りとして、イエスの誕生と東方の三博士が訪ねてきた場面が人形でつくられ、展示されていた。

12月5日(金)：コルドバ

今日は、バスでコルドバに向かう。コルドバまでは2時間ほどかかるという。その道すがら、今日の見学予定施設についての話などを聞いていると、突然霧が深くなり、外が全く見えなくなった。バス車内に表示されていた外気温は3℃。コルドバに近づいたところには霧も晴れ、気温もだいぶ高くなった。

モスクと教会のメスキータ

旧市街の中は、バスを止められない。私たちは、グアダルキビル川のほとりでバスを降り、ローマ橋を渡って旧市街にあるメスキータ（大聖堂）に向かった。ローマ橋は、その名の通り、1世紀のローマ帝国の時代につけられた橋である。その後の戦争などで何度も破壊されながらそのたびに修築された橋で、近年の修復で今はとてもきれいになった。橋の上は自動車の通行が許されていないので、ゆっくり歩くことができる。

コルドバは、後ウマイヤ朝の首都が置かれた町である。後ウマイヤ朝の建国者アブドアルラフマン1世は、アッバース朝の首都バグダッドをしのぐ大モスク（スペイン語でメスキータ）を造ろうと、西ゴート族の教会を買い取って、その跡地に教会に使われていた資材を利用して建設した。大モスク（メスキータ）は、息子のヒシャーム1世の時代に完成したが、その後も、3回にわたって拡張され、今ある巨大なモスクとなった。912年に後ウマイヤ朝として最初のカリフに即位した、アブドアルラフマン3世は、コルドバを繁栄



メスキータ

させ、2回目以降の拡張の基礎を築いた。

メスキータの入口から入ったところに「オレンジの中庭」がある。モスク時代には、礼拝の間に入る前に身体を清めるところで、井戸やオレンジの木が植えられていた。中庭回廊に沿って進み、建物の中に入ると林立する円柱の森に圧倒される。

メスキータはローマの影響を受けて、円柱、付け柱、二重アーチが使われ、上部の半円アーチががっしりと建物を支えている。この壮大なモスクが、キリスト教の寺院として聖別され、大聖堂に生まれ変わった。モスク時代には中庭に向かって開いていたアーチが、すべて壁によって閉じられ、内部はすっかり暗くなった。

キリスト教の寺院になっても、主礼拝堂は建物の端にあった。それに不満を持った16世紀のセビリヤの司教が、メスキータの真ん中に、十字の形の教会を造ることを提案した。市の委員会などから反対された司教は、当時の国王カルロス1世に、直接承認を求めた。スペイ



聖堂聖歌隊席

ン王に即位するまでは現在のベルギーで生まれ育ち、スペイン語が話せなかったカルロス1世である。当然メスキータを見たことはない。この王から承認をもらい、大聖堂の建築が進められたのである。

後日談がある。コルドバを訪れてメスキータを初めて目にしたカルロス1世は、「メスキータがこのようなものだとは知らなかった。知っていれば決して手を付けるようなことはさせなかっただろう」と言った。

花の小道の哲学者

聖具室などの見学の後、メスキータの近くにある、花の小道

に向かった。出口から2〜3分ほどのところが花の小道で、花の小道から先が旧ユダヤ人街である。この一角にマイモニデス広場と呼ばれる広場と



花の小路

はいえない小区画がある。コルドバ生まれのユダヤ人マイモニデスの座像がある小区画で、彼は、医者・哲学者としてこの界限では有名である。

マイモニデスと関連して、コルドバ生まれの哲学者イブン＝ルシュド（アヴェロエス）に触れる必要がある。イブン＝ルシュドは、12世紀のコルドバで活躍したイスラム教徒の哲学者で、医学、天文学、神学、哲学を研究し、アリストテレスの著作をアラビア語に翻訳した。アリストテレスの著作のアラビア語訳は、10世紀末にイブン＝シーナーが行っていたが、イブン＝ルシュドは「新プラトン主義」の影響を受け、プラト的な神学理論による解釈を行って、スコラ哲学に影響を与えた。また、ガザリーによって始められた、理論を排し直感的に神を感じ取るというスーフイズ

ムの思想に反対して、イスラム神学の理論付けを行おうとした。しかし、レコンキスタと戦っていたムワッヒド朝は次第に宗教的に不寛容となり、イブン＝ルシュドの学説も受け入れられなくなった。1197年その著作は発禁とされ、その地位も追われてコルドバを去り、1198年にモロッコのマラケシュで生涯を閉じた。同じ頃、ユダヤ人のマイモニデスもアリストテレス哲学を研究していたため、モロッコのフェスを経てエジプトに逃れた。

ラ・マンチャ地方の風車

コルドバ見学の後、昼食後にラ・マンチャ経由でマドリッドに向かった。ラ・マンチャ地方は、セルバンテスの『ドン・キホーテ』の物語の中で、キホーテが風車を巨人と見て戦ったところとして、有名である。風車は、風を受けるために高台にあるので、静かな町中を走り抜けて高台に上った。日没が近づいていたが、まだ風車の中を見ることができるといふ。早速、入場券を買って中に入った。

この風車の内側の壁には、何と日本語の説明が貼ってあった。

途中のレストランで夕食を食べた後、今夜の宿泊地マドリッドに向かった。

12月6日(土)：マドリッド

午前中は、マドリッド市内の見学である。まず、ホテル近くのスペイン広場で、ドン・キホーテとサンチョ・パンサの像と対面した。この広場で合流した現地ガイドさんから、日本の俳優松本幸四郎が『ラ・マンチャの男』の上演を続けていることでスペインから表彰されたとの話を聞いた。



ドン・キホーテ像

プラド美術館と ソフィア王妃芸術センター

今日最初の見学は、プラド美術館。この美術館は、パリのルーブル美術館、ロンドンのナショナルギャラリーと並ぶ世界の3大美術館の一つと言われているが、その評価・特徴を短く言えば、「スペインの歴史が詰まっている」ことである。宗教画だけでなく、レコンキスタの場面を主題とした歴史画や、宮廷の人びとの肖像画などがたくさんある。プラド美術館では、短い時間だったが、画家に焦点を当てて、わかりやすく、楽しく説明してもらった。

ベラスケスの作品では、有名な『女官たち(Las Meninas)』は丁寧な説明でゆっくり見学した。

ゴヤの作品では、『カルロス4世の家族』や、『裸のマハ』『着衣のマハ』、歴史の授業でよく用いた『五月三日』（フランス軍によるマドリッド市民銃殺刑の場面）や、フランス軍に雇われたエジプト人親衛隊とマドリッド市民の戦闘を描いた『五月二日』などをよく説明してくれた。そのほか、エル・グレコの『受胎告知』やムリーリョの『無原罪のお宿り』などが必見の美術館である。

続いて見学に向かったのは、国立ソフィア王妃芸術センターで、ここにピカソの『ゲルニカ』が展示されている。この絵は、スペイン北部バスク地方の町ゲルニカが、ドイツ空軍の無差別爆撃によって破壊されたことに怒ったピカソが、平和への祈りを込めて、スペイン内戦中の1937年パリ万国博覧会のスペイン館の壁画として描いた作品である。館内には、このときのスペイン館の模型があり、『ゲルニカ』がどこに展示されていたか示されている。

また、『ゲルニカ』の完成に至る過程でピカソが描いたスケッチとして、人の目をした牛、子供を亡くし悲しむ母親、いなく馬、人の泣き顔などが展示しており、制作過程がわかって面白かった。

国立ソフィア王妃芸術センターには、ミロやダリの作品もあり、絵画好きには嬉しい場所である。



トレドの街を望む

なお、このセンターの出入口近くには売店もあり、『ゲルニカ』の縮小複製やプラド美術館で見た『女官たち』の縮小複製も買うことができた。

昼食後、トレドに向かう。途中の休憩所に、騎士の甲冑や陶器の人形などが飾ってあった。また、あらためて気付いたのは、刃物類がたくさん売られていること。この地方の特産品なのだろうか。

西ゴートの古都「トレド」

午後は、トレド見学である。トレドはタホ川に囲まれた要塞の町で、西ゴート王国の首都であり、ハプスブルク家のカルロス1世が、その広大な領土の首都とした町である。町を囲む見事な城壁は、絶えず戦争に備えなければならなかったトレドの歴史を物語っている。

私たちは太陽の門の西側にあるエスカレーターで城壁の上まで登った。さらにイスラムの影響が残る家並みの中の狭い道を登ってゆくと、家々の間から、ときどき大聖堂のドームの屋根が見えた。

今回のトレド見学の一歩の目玉はサント・トメ教会で、エル・グレコの最高傑作といわれる『オルガス伯の埋葬』を見ること。サント・トメ教会に着いて驚いたのは、小さな教会の狭い入口に行列ができていたことである。添乗員さんから、「スペイン人は行列を作って並ぶことが大嫌い」で、「スーパーマーケットのレジの前でも行列しない」と聞いていたのに、教会の前に行列がある。きっとこの人たちは、ほとんど外国人なのだろう。



大聖堂

教会の入口の左右には、『オルガス伯の埋葬』の一部に描かれているエル・グレコの息子ホルヘ・マヌエルが描かれている。

『オルガス伯の埋葬』は、教会の壁一面を占める大きな絵で、離れないと全体を見ることはできない。行列を作って絵を見るので、当然のことながらゆっくり見ることはできない。事前に現地ガイドさんから聞いていたところを重点的に見て終わった。一言で言えば、静的な地上の埋葬場面と、動的な審判の行われる天上界の対比で、人物の表現方法も、地上と天上で異なっている。なお、この絵に描かれている息子のポケットのハンカチに、エル・グレコの署名がある。この絵に描かれた人物は、私の理解していたエル・グレコの他の宗教画よりも、生き生きしているように思えた。

土産物屋が並ぶ狭い道を抜け大聖堂の前に行くと、大聖堂前の広場で女性が鳩を操るパフォーマンスをやっていた。鳩の動きと女性の動き。音楽に合わせた両者の動きは、踊りとして楽しめた。

時間の都合で大聖堂は外から見学することしかできなかった。

このトレドの町は、ローマ、西ゴート、イスラム、カトリック支配の時代と歴史の変遷を経た町であるが、この町には多くのイスラム教徒やユダヤ人たちが住んでいた。後ウマイヤ朝は首都をコルドバに置いていたが、16世紀にスペイン王国が首都をマドリッドに遷すまでの間、トレドは、イベリア半島における政治、文化の中心地として栄えた。その政治や文化を支えたのはユダヤ人であり、イスラム教徒たちであった。レコンキスタ

が行われていた時代に、ヨーロッパにイベリア半島経由でギリシア、ローマの文化が伝えられたが、アラビア語に翻訳された状態で伝わってきたことを忘れてはならない。

イブン＝ルシュドがアラビア語訳したアリストテレスの著作集などは、このイベリア半島で、ヨーロッパの言語であるラテン語に再翻訳されたのである。この時代のイベリア半島の政治、文化の状況を考えれば、そのような翻訳の中心地の一つは、このトレドであることは明かである。そして、そのような翻訳をできる知識や語学力を持っていたのは、ユダヤ人やイスラム教徒たちであったことも推察できる。

フラメンコショーに酔う

スペイン最後の予定は、夕食後のオプションコースのフラメンコショー。マドリッド市内は道路の渋滞がひどくて遅くなったため、せっかくの夕食も大急ぎで、何を食べたかよくわからないうちに終わった。あとで旅行案内などを見て考えると、「皮付きの豚肉」ではと思うようになった。マドリッドの名物に「子豚の丸焼き」がのっていたし、皮もかりかりだが柔らかくおいしかったことから考えたのだけれど、実際は何だったのだろうか。

フラメンコショーにはどうにか間に合い、楽しむことができた。あまり大きくない舞台、広すぎない客席、酒を飲み食事をしながら舞台を楽しむ観客。「歌と踊りもやっているレストラン」である。

フラメンコダンサーは、男女とも足さばき、手さばきはみごとだった。ダンスのきめの形で歌舞伎の所作を連想したのは、私だけだろうか。男性ダンサーの力強い踊りと、女性ダンサーの女性らしい踊り。演奏するギタリストたちは男性で、演奏だけでなくショーを楽しませる演出にも巧みだった。常連グループのリクエストで、客の男性が舞台に上がって踊り、舞台の上も客席も盛り上がって、フラメンコの夕べを楽しめた一時だった。

スペインでは12月6日（土）は、スペイン現行憲法の記念日で祝日。8日（月）はマリア祭の祝日。日曜を挟んで3連休である。スペイン中が

金曜午後から休み気分だったという。ホテル前の道路は、昨夜に続いて、明け方まで騒がしかった。

12月7日(日)：マドリッド

最終日、飛行機のマドリッド空港発が8時30分、帰りは予定通りルフトハンザ航空で、まずフランクフルトに飛ぶ。途中、雪をかぶった山脈の上を飛び越える。朝日に輝く雪山はまぶしいほどだった。飛び越えた山脈は、私は、ピレネー山脈と思っていたが、アルプス山脈かもしれない。フランクフルトからは11時間35分の空の旅。ゆっくりと眠りながら帰るだけである。

—— スペイン旅行 ——

夢のような1週間を 過ごして



豊田岩男

12/1(月)～12/9(月)の間、スペイン旅行をしてきた。地中海岸のバルセロナ、バレンシア、アンダルシアのグラナダ、セビリア、コルドバ、内陸部の首都マドリッドと古都のトレドを回った。

ヨーロッパを訪れる時に毎回感じるのは、私だけだろうか。太陽を追っかけて12時間以上飛行機に乗ると、その間、眠っているのか目覚めているのかわからないという、中途半端な時を過ごし、夜が明けるとそこは夢の世界が広がる。中国やモンゴル、ヴェトナム、台湾等のアジア諸国を訪れた時は、こんな感じはしない。日本に帰ってきても、あの一週間の出来事はほんとの事だったのだろうかと思ふと半信半疑となる。

植物記

今回行ったスペインは、ケッペンの気候区分だと北部ピレネー地方を除いたほぼ全域が地中海性気候のCsに属し、夏に雨量が少ないことになる。しかし、私達が滞在した1週間は、冬にもかかわらず殆ど雨に遭わなかった。地中海に面した東海岸線は、バレンシアを中心にオレンジ畑が一带に広がっていた。アンダルシアに入ると、延々とオリーブ畑が続き、一部には、葉を落としたアーモンド畑も点在していた。都市部では、プラタナス、梅檀、ジャカラнда(ハカラнда)等の街路樹、アンダルシアのグラナダやセビリアではオレンジ等の柑橘系の街路樹が、傘のように独特な樹形に仕立ててあった(写真)のが目立った。しかし、日本ではよく見かける銀杏の木は、街路樹には殆ど使われていなかった。

首都マドリッドへと内陸部に入ると、高原地帯となり、今は収穫後更地になっている小麦畑が広がっていて、また、所々にはブドウ畑が見られた。このラマンチャ地方は、ドン・キ・ホーテの時代には、荒涼とした乾燥地帯であったようだが、現在は、アメリカ中西部に見られるような半径が50メートル以上もあるような大型散水機が設置されていて、灌漑農業が行われているとのことであった。今回は行かなかったが、北部ピレネー山脈周辺は雨量が比較的多く、野菜やブドウの産地となっているようである。

マスク

帰りは、マドリッドからフランクフルトへ飛び、ここで乗り換えてルフト・ハンザで一路日本に向かった。帰りもまた、うつらうつらしながら12時間以上機中で過ごし、朝、成田に着いた。ここで目に付いたのは、白い大きなマスクで顔の3分の一程を覆った人の多いことだった。1週間程いたスペインでは一人もこのようなマスクをしている人に会わなかったため、奇妙に感じた。改めて考えてみると、一体このマスクをすることでどんな効果があるのだろうかと思ふと不思議に思った。

車

スペイン国内をバルセロナ→バレンシア→グラナダ→セビリア→コルドバ→マドリッド→トレドとチャーターしたバス

で旅行をした。よく高速道路が整備されており、冬季ではあったが周囲の景色を堪能することが出来たし、バスの前後を走る車も観察することが出来た。状況は、友の会では2008年11月と2010年12月に過去2回イタリア旅行を行っているが、この時とほぼ同じであった。殆どがフィット・マーチタイプの小型乗用車で、黒塗りの大型乗用車は見かけることはなかった。日本のメーカーの車も走っていたが、イタリアの時と違うことは、韓国車を見かけたことであった。また、2008～2010のイタリアの時はハイブリッド車はゼロであったが、今回のスペインではタクシーにプリウスが使用されているのを各地で見かけた。また、ガイドさんによると、スペインはセアト (SEAT) という国産車を持っており、フィアットと技術提携をして製造していたが、現在はフォルクスワーゲングループに属しているようだ。マークがSの字で、最初は日本車のスズキの車かと思ったが、よく見ると字体が異なっており、見分けがつくようになった。

接触と交流

異文化の交流地点を訪れることは、興味深い。今回のスペインには、400年以上前に日本人が訪れている。西欧世界への渡航は当時としては珍しい。九州のキリシタン大名等が名代として中浦ジュリアン、伊東マンショ、原マルティーノ、千々石ミゲルの4人を派遣した、いわゆる天正遣欧少年使節 (1582～1590) である。彼等は、当時のスペイン国王フェリペ2世に謁見し、漆の鉢や盃、文箱などの工芸品を献上し、ヨーロッパの人々は極東渡来の精巧な美術品にうなつたといわれている。

711年、カトリックの王国であったトレドに都を置き西ゴート国がイスラム教徒により滅ぼされた。西アジアでは750年に、ウマイヤ家からアッバース家に政権交代があり、ウマイヤ家の一族であったアブドゥル・ラーマンが、アッバース家の追っ手を逃れて、イベリアの地にコルドバを都として、756年後ウマイヤ朝を開いた。この頃、ピレネー山中の一部を除きイベリア半島の全域がイスラム化した。929年、第8代アミールのアブドゥル・ラーマン3世がカリフを僭称して、ここに

西カリフ国が成立した。この頃のコルドバはイスラム文化の花が咲き、人口も当時のロンドンの5倍近くもあり、その名声は北ヨーロッパにまで轟き、キリスト教の学僧たちは競ってコルドバにギリシア・ローマの学問を学びに来たのである。

ヨーロッパ中世における学問水準のイスラム側の優位については、例えば、11世紀～13世紀の十字軍時代の医学の水準は、遙かにイスラム圏の方が高く、脳腫瘍のため激しい頭痛への対処方法がある本に書かれていた。十字軍側では、頭痛のする頭部に塩をすり込み、僧侶による祈祷が行われ、イスラム側は、医師の頭部切開により、腫瘍の摘出手術が行われたそうで、結果は火を見るよりも明らかである。これは、イスラム側がギリシア・ローマ文化を的確に継承したことを物語っており、2010年12月に、南イタリア旅行に行かれた人は、ナポリの博物館で、ポンペイ出土の医療器具を見たことと思う。1世紀のローマのポンペイでは、現在とほぼ同様のメスや鉗子が使用されていたようである。

以後、キリスト教徒によるレコンキスタが行われ、1492年にイベリア半島からイスラム教徒の支配領域は、消えて無くなった。

今回のスペイン旅行では、コルドバのメスキータやグラナダのアルハンブラ宮殿等では、モスクとキリスト教会堂の融合した姿やイスラム建築の粋を見ることが出来た。

また、南イタリアの旅行時にシチリアのパレルモで見たパレティーナ礼拝堂やモンモアーレのドゥオーモは、中世キリスト教文化、イスラム文化、ビザンチン文化やノルマン文化が接触・融合した結果出現した素晴らしい建築物であった。

西ゴート国以前のこの地はローマ帝国の支配領域になっており、現在のイタリア遺跡の地には植民市が建設されており、五賢帝の一人ハドリアヌスの出身地となっている。また、ハンニバルの故郷もこのイスパニアであった。

今回のスペイン旅行は、摩擦・闘争、接触・交流から生み出された積層された歴史を見る楽しみが味わえた旅であった。

第55回 **全歴研大阪大会**

7月30日～8月1日 大阪国際交流センター



小澤 拓 美

7月30日から8月1日、思い立って全歴研大会に参加してきました。大阪国際交流センターです。東京からは、現職では仙田先生・川瀬先生をはじめ知ってる方だけで10数人は参加していました。全体の参加者は、数えたわけではありませんが、結構盛会だったと思います。

第1日目の分科会は、第2に参加しました。

「開かれる歴史風景―教科・科目の壁をこえて」を分科会テーマとして、①神戸の松陰中学校の古澤美穂先生の、「朝鮮開国から日清・日露戦争にいたる道―世界史と日本史の壁をこえて」②岡山の玉野高校の大坂秀樹先生の、「ロックで学ぶ『現代社会』⇔『世界史』」③大阪市立都島第二工業高校の梅田徹先生の、「国語科と歴史科の接点」でした。ビートルズを使った歴史授業も、文楽も面白かったです。

向こうは、ちょっと陽が長いので、夕食前にホテル近くを散歩。文楽発祥の難波神社と、芭蕉終焉の花屋の前の南御堂に行ってきました。

第2日目午前中のシンポジウムは、

早稲田の塩崎悠輝氏、NHKの荻野昌樹氏、大阪歴史博の加藤俊吾氏という3人がパネリスト。

イスラム史学者、歴史番組デスク、博学連携に熱心な学芸員という組み合わせです。

内容的に最も深かったのは、塩崎さんのインドネシアをフィールドとしたイスラムへの視点です

が、荻野さんの話で、歴史への招待・歴史誕生・歴史発見・ライバル日本史・堂々日本史・その時歴史が変わった・歴史秘話ヒストリアなど、代々の歴史番組制作の舞台裏がなかなか愉快でした。

テレビ嫌いの私でも、見てみようかな、という気になりました。

午後の講演は、大阪大の秋田茂教授。「1930年代のアジア国際秩序―大阪から考える世界史」ということで、オタワ会議によるブロック経済に関する一般的理解がいかに関違ってるか、大英帝国権力にとっての重要問題は工業生産でなく金融なのだ、などとデータに基づいて話されました。

彼は、阪大の教養課程の歴史教育に関しても、大きな試みをして、同僚たちと教科書として「市民のための世界史」(2014.4大阪大学出版会)を出しました。

帰りの新幹線でざっと目を通しましたが、前書きで、「現役高校歴史教員への挑戦状」と書いています。

今までの私ではあり得ないことですが、大会参加以外どこも行かずに、講演が終わって1時間後には新幹線に乗って帰途についていました。

ほんのご報告まで。

都歴研秋季史跡見学会

11月16日「茨城にみる日本のすがた」



高田 岩 男

弘道館見学のご案内を拝見した時は、「いまさら」という想いもないではなかったが、現地で東日本大震災の被害・修復による新知見の説明をいただいて、「やっぱり来てよかった」と、知ることの喜びと見学委員会への感謝でいっぱいになった。まず驚いたのは、弘道館正庁「正席の間」の壁

や床、天井等の構造が明らかになったことである。説明によると、畳の下は床板は二重に張られ防音・防湿・防寒・防蟻も兼ねていたらしいことであつた。壁も竹の簀の子を芯にした土壁であつたが、表面は八枚もの和紙を張り重ねて仕上げてあつた。上の寛永寺より退去した慶喜がひたすら謹慎した同館至善堂「御座の間」も同様の構造であることが分かったという。

孔子廟その他も大きな被害を受けて修復したとのことであるが、とくに印象深かつたのは、八卦堂内の弘道館記碑であつた。これは堂内に入ることが許されて側近くに寄り、修復過程の苦心の跡をつぶさに観察することができたからである。震災直後の状態を示すカラー写真を併せて如実にその状況を想像することができた。あの巨大な碑石を支える構造も明らかになり、藩主斉昭が籠めた強烈な建学精神が、その先進的な工法からも揺るぎないものであることが、観る者の心に迫ってくる。文字通り雨降って地固まるの感があつた。改めて偉大なる斉昭の人格、人柄の再検討の必要さを感じさせるものがあるように思われた。弘道館の震災復元修理は今年（2014）の3月末をもって完了し公開にこぎつけた。禍を転じて福となす、古くてホットな見学であつた。

那珂湊の反射炉後、井上日召の護国寺、さらには阿見町の予科練記念館と、それぞれ懸命に生きた人々の意思を思いやる見学行であつたが、最近いろいろと理由をつけて戦争に近づこうとする動きが急である。我々歴史の研究と教育に携わる者としては、しっかりと過去に学んで社会的責任を果たしていかなばならぬと思われる。解散後、己の年齢を忘れて反省会に参加したのも、見学委員会の皆さんへの感謝の気持ちのしからしめるものであつた。

（付）茨城県立歴史館構内に移築された水海道小学校（明治14年の擬洋風建築）が女優の羽田美智子さんの高祖父宮大工の羽田甚蔵氏の苦心作であることもNHKファミリー・ヒストリーで知り、これまた驚きであつた。

関歴研東京大会 兼 都歴研秋季講演会

12月20日（土）午前10時より 都立石神井高校

午前 研究発表 2件

午後 講演 老川慶喜「鉄道の創業」

午後2時半～ 史跡見学



村木逸子 小澤拓美

研究発表① 稲見真梨 先生

美術館・博物館を利用した夏季講習の実践

あいうえの学校 学校向けプログラム

東京都美術館の特別展を休館日（月曜日）に開室し鑑賞授業を行うプログラムで、一般から応募し、訓練を受けたアート・コミュニケーター（とびラー）といわれるセミプロの人たちがリードして、美術館での鑑賞の仕方や個人々々の興味に応じたアドヴァイスなどをしてくれる制度。

稲見先生は夏休みの講習としてこのプログラムに生徒と参加した。

鑑賞したのは「古代エジプト展」（時期によってウフィッツイ美術館展など）。ねらいは「美術鑑賞の楽しさを味わう」と「美術館での仕事 展示の仕方の工夫」。当日までに、美術館との連絡・打ち合わせを経て7月末に参加者26名を引率。

授業でこのプログラムに参加させるのは難しい。希望者のみで実施した。この制度の場合、美術展の鑑賞の仕方、注目するところ、グループ分け、まとめ方などは複数の専門スタッフ〈とびラー〉がリードする。美術館初体験の者にも懇切丁寧に指導してくれる。ミイラの造り方などにも及んだ。

稲見先生によると、教員の側には美術館のスタッフと作り上げていく楽しさがある。自分だけではないため労力が少なくて成果が大きい。

生徒の側には学校では味わえない本物体験ができる。親、教員以外の大人から教えられ語り合う機会が得られる。実施後、新聞の記事やテレビでの紹介などに目がいくようになる。世界史への関心も出てきた。

稲見先生が、とても楽しそうであった。事前指導をしたものの、集合時間に集まるかどうか不安ではらはらしながら生徒を迎え、「本物」に触れさせ、大人になっていく生徒の成長を温かく見守っていた。教師が楽しそうに語ることは生徒の中に何かを残すものである。

美術館・博物館などの利用、活用は「学習指導要領・世界史」のなかで提起されている。

研究発表② 中村修 先生

東京都設定科目「江戸から東京へ」の授業実践

授業の対象は第2学年理系コース1単位の日本史。テキストにそって緻密な年間指導計画が立てられていた。その指導計画表を見ると、勤務校の立地する練馬区の歴史をその指導内容に何か所も折り込み、身近に歴史を実感させるような内容のカリキュラムとしていることに驚いた。赴任してまだ日も浅いにも関わらず教材化しており研究熱心であることがうかがえる。

また、今回の発表では「浮世絵から多角的に考える江戸時代の文化と都市」として浮世絵をプロジェクターを使ってカラーで見せ、細かなところまで制作過程を見ることができるような授業を展開した。発表者は板書のチョークの色の使い分けまで配慮しているようで、その見事さ、完璧さに驚いた。多分、授業内容が生徒にとって分かりやすいからだろう、質問や意見の多く出る活発な授業が展開されているとのことであった。

(村木)

講演

鉄道の創業～井上勝を中心に～

老川慶喜教授（立教大学経済学部）

平成26年度関歴研東京大会兼都歴研秋季講演会では、立教大学経済学部の老川慶喜教授が、鉄道の父と称される井上勝について講演されました。

井上は、天保14年萩に生まれ、文久3年に長州

藩が密航させて英国に留学させた5人の一人（他は、井上馨、伊藤博文、山尾庸三、遠藤謹助）である。University College of London等で化学・鉱山・鉄道を学んだ。明治維新後、木戸孝允に呼ばれ大蔵省造幣頭兼民部省鉱山司鉱山正に任じられる。鉄道敷設に狭軌を採用したが、これについては「余は全く先見の明がなかった」と後に（明治42年）述べている。東京横浜間鉄道工事の最中、明治4年に鉱山頭兼鉄道頭となる。10年には鉄道局長に就任した。

東京・関西間鉄道については、はじめ井上は中山道ルートで進めたが後に路線変更を主張、19年東海道ルートが閣議決定された。その他、山陽鉄道、九州鉄道など全国的な鉄道網の計画を進めた。18年には信越線が開通、碓氷越えにアプト式鉄道が導入された。22年には東海道線が全通、24年には日本鉄道東京～青森間が全通した。

日本鉄道全通の年に、日鉄副社長小野義真や三菱の岩崎弥之助と図り、小岩井農場の経営を開始した。小・岩・井とは3人の頭文字による。しかし、井上は牧畜経営に素人であり、数年にしてこの事業から撤退した。この間、23年には鉄道庁が発足、井上は鉄道庁長官に就任。しかし、議会開設後は次第に精彩を欠くようになり26年に長官を辞任した。

その後、帝国鉄道協会名誉会員、会長等に就いたり、清国視察をして李鴻章と面談して清国鉄道拡張論を話した。明治43年に鉄道院顧問として、英国博覧会視察に行ったイギリスで逝去した。墓は、品川東海寺大山墓地にあり、今はすぐ横を新幹線が轟音とともに走り抜けている。

井上は私設鉄道を批判し鉄道国有化論者としてとらえられるが、老川教授によると、鉄道会社分立経営を避けるため、すべての私設鉄道を否定していたわけでないとのことである。井上の銅像が数年前まで、東京駅正面にあったが、東京駅の復元工事によって撤去された。現在は保管中だそう、やがてどこかに再配置するかもしれないが、未定とのことである。（まとめ小澤）

史跡見学

講演のあと、電車で移動、東村山駅に再集合しました。関歴研を兼ねることで、いつもより多い見学参加人数でした。三鷹校長の仙田先生の案内で、多摩郡の郡衙あとと推定されている東村山駅周辺を回りました。まず、東村山駐車場の碑を見て、川越鉄道開通の経緯などの説明を受けました。今は住宅街の中の道に成り下がってしまった旧参道を通り、正福寺に向かう。地蔵堂は応永24(1407)年の建築であるが、同じく室町中期の円覚寺舍利殿とともに鎌倉期の禅宗様建築をよく残し国宝指定されている。迎賓館赤坂離宮が指定されるまでは、東京都唯一の国宝建築物だった。

予定ではこの後、八国山に登って、新田義貞の鎌倉攻めの時の故地にあたる將軍塚を見学する予定であったが、雨のために断念する。そして、多くの板碑を持ち、かつて「ちらかし寺」を呼ばれた徳蔵寺に行く。特に重文「元弘の板碑」を前に、仙田先生が丁寧な説明をしてくれました。個人的なことで恐縮だが、この辺りは小生の自宅から近くで、この寺も数回訪れているものの改めてこの碑の重要性を学びました。飽間斎藤盛貞と同孫七家行が元弘3(1333)年5月15日に武蔵国府中で討ち死に、飽間孫三郎宗長が18日に相模国村岡で討ち死にしたことを供養するものであるが、この碑によって府中および村岡の戦いのあったことが分かったとのことである。飽間斎藤氏とは上野国飽間郷茶臼山城を拠点とし、元弘2年には楠木正成の拠る河内国千早城攻めを義貞とともに行的、その後義貞の討幕軍に加わったのである。

その後、皆さんは、豊島屋酒造見学に向かう。もとは江戸鎌倉町にあり、江戸名所図会にも出てくる。銘柄は「金婚」は結婚式でよく使われるようです。ただ、私は自宅と逆方向になるし、行ったこともあるので今回は失礼いたしました。お世話くださいました仙田先生や都歴研幹事の皆様にお礼申し上げます。また、小生の第二の故郷である東村山にお越しくださった参加者の皆様に感謝申し上げます。(小澤)

都歴研春季講演会

2015年6月20日 於三鷹中等教育学校



ヨーロッパの中世をどうとらえるか

—教科書の記述と最先端の研究の違い—

講師 千葉 敏之 教授
(東京外国語大学)

1) 山川出版社発行『新世界史』の執筆者の一人として、第9章「ヨーロッパの形成」を担当、そこに最近の研究成果を反映させた。

2) 今までは、近代化を遂げたイギリス、フランスを中心とし、そこから振り返った中世である。それが中世のヨーロッパを東西に分けて考えることになった。それは意味がなく全体としての中世を「地中海・ヨーロッパ大陸」としてとらえるべきである。

3) 視覚教材から歴史を読み取ることが出来る。教科書にはカール大帝の黄金の棺、イノケンティウス3世について描かれた壁画、ロマネスク建築などについて載せている。

4) 時代区分について古代から中世、中世から近世について 年号ではなく大きなスパンで時代の変化をとらえるべき。中世は信仰が社会をつくった時代であること、中世が1000年続いたその力とメカニズムを理解させることが目標である。1000年の単位で見ると文化遺産の価値がわかる

最近の関連出版物、ヨーロッパの出版物の紹介があった。専門的過ぎるが・・・

(まとめ村木)

都歴研友の会ホームページ

<http://sky.geocities.jp/torekikentomonokai>

友の会の諸連絡、国内・海外研修旅行の記録、
「友の会だより」バックナンバーもカラーで。

憧れのヒヴァ・フハラ そしてサマルカンド

増 田 克 彦

距離6386キロの成田・タシケント間を、週に2便、ウズベキスタン国営の航空機が飛んでいる。黄土色の台地が延々と続き、包頭、ウルムチといった町の上を飛ぶ。往きが9時間、復り7時間半。この日はほぼ満席。客の中心は日本人ツアー3団体およそ80人である。

春の都歴研講演会で小松久雄氏が、北部を中心に居住する全人口の5%程のロシア系住民の動向について言及していたため多少の不安もあった。が、心配することはなかった。治安は良く、落書きもなく、まわりつく土産物売りも少なかった。いい加減なところもあるが愛想の良い親切な人々である。良い意味でも悪い意味でもオアシスの民なのだろうか。

いつも思うのだが、世界史担当教員には30代の10年間程、一年おきくらいには希望する地域の視察研修に派遣すべきだ。多少の補助金と時間の保証だけでよい。退職してからでは個人的趣味以上の何物でもなくなるし、その学びを子供たちをはじめとする人々に還せる手だても極端に限られる。

タシケントでの宿泊先は1966年の直下型地震後に築かれた新市街の中心、ティムールの騎馬像のあるアムール・ティムール広場（モンゴルでのチンギスハン同様、独立後のウズベキスタンはティムールなのだ）に接するウズベキスタンホテル。ソ連式のホテルだけあって感心するほどどっしりとした造りである。

2つのメドレセ（神学校、神学校跡と言った方が



ヒヴァ旧市街の西門

正確か）を見学後、チョルス・バザールで買い物。土産にとシルクを探して奥まで入り込む。安い。

チョルス駅からソ連時代に作られた地下鉄に乗車。二駅。新市街に戻る。素晴らしい装飾のホームとがっしりした車両の地下鉄である。ムスタキーリク（独立）広場へ。周辺には官庁が並ぶ。独立後、正面の装飾はレーニンから地球儀に変わったとか。ウズベキスタン歴史博物館の展示はまあまあといったところ。日本人捕虜の技術で建てられたナヴォイ・オペラ劇場、地震の際にびくともせずウズベキスタン人の感嘆するところだったという。工芸博物館から、強制労働を強いられた79名の日本人捕虜が葬られている日本人墓地へ。大きな墓地の一角。周囲のイスラム墓地を見ると、その埋葬の仕方が随分と変化してきているのに気づく。

夕方、タシケント空港からプロペラ機でウルゲンチへ。1時間半。ウルゲンチ空港からはバスでヒヴァ旧市街に接するホテル。

ヒヴァ旧市街全体は1990年の世界遺産。カ

ラクム砂漠への出入り口にあるオアシス。ヒヴァ汗国の時代には「中央アジアの真珠」と言われた。現在の城壁は高さ8m、厚さ6m、長さ2300m。前6世紀のアケメネス朝、前4世紀のマケドニア、2世紀のクシャーナ朝、これらはペルシャ文化、ギリシャ文化、インド・仏教文化をこの地にもたらし、722年のアラブ侵攻後はイスラム化とトルコ化が進んでイスラム文化の中心ともなった。13世紀、チンギスハンに、14世紀にはティムールに破壊され、16世紀、南下してきたウズベク族によって再興された街である。

西門（オタ・ダルヴィザ門）から入り西門から出ることになったが、丸一日城壁に囲まれた旧市街をめぐる。20のモスクとメドレセ、6基のミナレットをはじめ、様々な建築物が所狭しと建ち、メインストリートを中心に土産物屋がこれまた立錐の余地のないほどに並ぶ。現地ガイドの話では、旧市街に住んでいる人々は元の貴族や豪商で、現在その多くは観光業に従事しているという。

アラベスクにまじって、ゾロアスター教関連の模様がいくつもあるという。現地ガイドの言うには、宗教そのものは10世紀には消えたがデザインとして残ったのではないかとのこと。多くのところで三角の飾りを見たが現地ガイドは魔除けとしか言わない。この三角もゾロアスター関連ではないかとも。

1852年着工の未完成の塔カルタ・ミナルを眺め、17世紀のクフナ・アルク（古い宮殿）の謁見の間に入る。冬には反対側にある丸い舞台状のところにゲルを組むらしい。展望台に登れば、四方が望まれる。タシュ・ハウリ宮殿（新しい宮殿）、アラクリ・ハーン・メドレセ、10世紀に建てられ18世紀の末に現在の姿になったという212本の木柱で構成されたジュマ・モスク、ヒヴァ汗国の末期1910年に建てられたイスラーム・ホジャ・ミナレット、バフラヴァン・マフマド廟とめぐる。

もう、この段階で、イスラム建築とそのデザインに食傷気味となる。モスクとメドレセの区別はわかるが、これまでかこれまでかという様々なアラベスクには飽きてくる。

夕食はヒヴァ汗国の夏用宮殿トザボグ・パレスで。夕食後、ウルゲンチからブハラへジェット機で約1時間。

ブハラは1993年の世界遺産。ブハラとは



中央アジア最古のモスク、イスマイルサマニ廟

サンスクリットで僧院の意とか。ヒヴァ同様、侵略と略奪・破壊、再建を繰り返し、現在の遺跡の多くは16世紀ウズベク族のシャイバニ朝以降のものという。強い日差しの中、広大な城壁を眺めていると、アレクサンドロスの軍勢の、突厥の、唐の、アラブの、そして、チンギスハンの、ティムールの軍勢の、なんとも言えず恐ろしげな喚声が聞こえてくる。

ウズベキスタンは現在、ウズベク人80%、ロシア人5.5%、タジク人5%、カザフ人3%だそうだが、実に120もの民族がいるという。そういえば、一目でモンゴル系・朝鮮系と思われる人々も闊歩している。ウズベク語はチュルク諸語に属すそうだが、都市部の方言はペルシャ語の影響を強く受けているともいう。表記方法はキリル文字である。

892年から943年にかけて建設されたという中央アジア最古のモスクであるイスマイル・サマニ廟を見、銀細工店を覗き、8世紀のものというアルク（城）、ソ連時代も開校を認められていたミル・アラブ・メドレセ、チンギスハンに破壊

されて16世紀に再建されたというカラーン・モスク、1127年に完成した46.5mとブハラで最も高いカラーン・ミナレットを見る。

途中、赤い布で覆った棺を担ぐ十数人の葬列に出くわす。なにやら大声で叫びながら足早に通り過ぎた。

幾つもの丸屋根で覆われたタキ・バザール、バザールの中の鉄屋に寄り、コウノトリの形をした鉄を購入。中央アジア最古のウルグベク・メドレセを見る。ロシア総督の家屋の豪勢さに驚く。この地が事実上のロシア領になったのは19世紀後半。屈折した心情がこれほどまでに贅を尽くした邸宅を作らせたのだろうか。

ラビハウズ、ハウズとはプールの意。噴水が美しく、ドイツ人観光客が軽食を摂っている。その一角にロバに乗った神学者ホジャの像。キャラバンサライを覗く。昼食はクカリダシュ・メドレセで中央アジア風ピラフのプロフ。夕食は1622年に建てられた鳳凰が白い鹿を掴み真ん中の太陽に向かっている装飾のナディール・ディヴァンベキ・メドレセで民族舞踊を鑑賞しながら。

ブハラからシャフリサブスへはバスで4時間程。

ウズベキスタンは砂漠が6割、2割が山。アラル海に注ぐシルダリアとアムダリア、二つの川に挟まれた土地である。土地はすべて国有。農民は植付作物の種類やその量等、必要に応じて国から借りるとのこと。ウズベク人には農民が多く、遊牧民にはカザフ人が多いとのこと。農作物は綿花と小麦が中心。国旗の白い部分も平和とともに綿花を表しているという。ウズベキスタンの代表的樹木はプラタナス、胡桃、桑、杏の4種。飛行機の中で出た赤ワインの甘さには驚ろかされたが、ウズベキスタンの人々は甘いのが好きなのだ。旅行中デザートに出たケーキも恐ろしいほどに甘かった。

教育制度は小学校が5年間、中学校4年、専門学校3年。小学校から専門学校までは義務教育。ウズベク語とロシア語それぞれを中心とする二種類の学校があるが、いずれでも英語を学ぶ。幼稚

園は3歳から6歳、専門学校の上に4年制の大学と2年制の大学院。成人年齢は17歳である。

貨幣単位はスム。1000スムが日本円にして40円程。紙幣は5000、1000、500、200、100スムとあるらしいが200、100スム紙幣にはお目にかからなかったし、コインもあるらしいのだが流通していない。コイン・紙幣蒐集者にとっては面白くない。

カメラチップは2000スムから1万スム（日本円に換算すれば80円から400円程）、トイレチップは500スム（日本円で約20円）。なのになぜか枕銭は1ドル。ドルで買い物ができる店も少なくないが、新札あるいは新札同様のドル札でなければ受け取らない。帰国してから知ったミャンマーの事情と同じだとすれば、中央銀行が何らかの理由で受け取らないのだろう。ミャンマーでは、集めたドル札をシンガポールの銀行に持ち込み新札と交換するのだが、シンガポールの銀行は、痛んだ紙幣は5%から10%減額して受けとるのだという。どうなっているのだろう。

当然のことながら、水事情は悪く、トイレ事情は甚だよろしくない。停電もあった。

シャフリサブスはティムールの生誕地。玄奘三蔵もインドへの途上立ち寄った地。2000年の世界遺産。ティムールが22歳の若さで戦闘中落馬して死んだ長男ジャハングールのために建てた廟、ドルッサオダット建築群。ドルッサオダットとは「大いなる力の座」の意。復元工事には中国の機材が活躍している。ドルティオヴァット建築群の裏手にはティムールが生前に作った自らの墓石がある。

ティムールの夏の宮殿であったアクサライ跡へ。アクサライとは白い宮殿の意。現在は入口のアーチだけが残っている。すぐ近くには独立後に建てられた巨大なティムールの立像。周囲を公園にする作業が進んでいるが、この国でもこうした作業に従事するのはどちらかといえば女性、男性は街中でおしゃべりに興じている。

乾季だから致し方ないが、細かい砂には参る。靴もズボンも真白である。それにしても暑い。こ

こ連日40度近い。

主たる宗教はイスラム教スンニ派だそうだが、実態として信仰は極めて薄いように思われた。旅行中一度も呼びかけの放送を聞かなかった。モスクで祈る姿も散見はされたが、現地ガイドは観光客に何の注意もしない。帽子を取れとも言わないのだ。

シャフリサブスからサマルカンドへはまたバス。約3時間。

モンゴル軍に虐殺され尽くし破壊され尽くされたサマルカンドを再建したのはティムール。サマルカンド・ブルーはティムールの愛した色、コバルトである。

中央アジア最大のモスクという1398年着工1408年完成の、ティムールが愛してやまなかった妻ビビ・ハニムのために建てたというビビハニム・モスクを見たあと、シャブ・バザールを覗く。流石に魚は殆どないが肉と野菜を中心とする品数の多さには感心させられる。続いて、現在は様々なイベントに用いられているというレジスタン広場（レジスタンとは砂地の意）に向かう。右に1636年完成のシェルドル・メドレセ。シェルドルとはライオンが描かれたとの意。入口の上部に鹿を追うライオン（残念ながらライオンには見えない）が描かれ、ライオンの背後には人面の太陽

が見える。偶像崇拜を否定している神学校の入口である。中央には元キャラバンサライ、後、1660年にメドレセにしたというティラカリ・メドレセ、左は、1417年のウルグベク・メドレセ。

ティムール以下三代の王が眠るグリ・エミール廟。1404年の建設。中央の黒い棺がティムールのもの。棺の裏には「私がこの墓から出た時、最も大きな災いが起こる」と記され、棺が開けられることはなかった。が、1941年6月19日、ソ連の調査隊が棺を開け、結果、ティムールの脚の障害などが確認された。しかしその3日後、ナチスドイツのソ連侵攻がはじまり、「祟り」を恐れたソ連は棺の蓋を鉛で閉じ、以後開けられていないという。シャーヒ・ジンダ廟、続いて絨毯工房を見学。夕食は文化財指定の豪華な民家でいただいた。メインは巨大な饅頭のマンティ。

翌日、急行列車でサマルカンドからタシケントへ。約4時間。タシケントではスーパーマーケットでの買い物のみで空港へ。

ウズベキスタンで美味しいものと言えば結果としてナン。スーパーマーケットでナンを買っておけば良かったと思ったが後の祭り。とにかくにも毎昼食時と夕食時、パルサー、サルバスト、キプライと言った名のタシケント産・サマルカンド産の地ビールも飲め、満足の8日間であった。

友の会歴史教育研究助成制度

1 制定理由

2007年の友の会発足以来、友の会は、東京都歴史教育研究会に対し年50,000円の経済的援助を行ってきた。しかしながら、東京都教育委員会の教育研究団体に対する補助金が2012年度より復活したことによって、友の会の都歴研に対する経済的援助の必要性は希薄となった。都歴研の了解を得、友の会としてはこれまでの経済的援助に代え、歴史担当教員の歴史教育実践並びに歴史教育研究の奨励にこれまで支出してきた年50,000円相当を用いたい。

2 対象者選定方法

毎年行われる全国歴史教育研究協議会大会において、東京都を代表し、分科会で自らの教育実践等を発表した者を対象とする。

3 奨励の内容と公表

発表1件につき額面5,000円の図書カードを贈呈し、その氏名等を「友の会だより」に掲載する。

ユスティニアヌスとテオドラに会いに

モザイクの町ラヴェンナへ

村 木 逸 子

世界史の教科書に出てくるイタリアの地名に「ラヴェンナ」があります。一番印象に残るのが「フランク王国のピピンはランゴバルド族を追い払い、その土地を教皇に寄進した。教皇はカロリング家のピピンをフランク王とした。寄進された土地がラヴェンナでこれが教皇領の始まり（754年）である。」というところでしょうか。

もう一つ、ビザンチン帝国のユスティニアヌス皇帝のところで「皇帝を中心にして帝国の官僚たちが並んでいるモザイク画」で、そこにラヴェンナの名が出てきます。

ラヴェンナとはどんなところかと 2014 年の夏に訪ねました。ボローニャからローカル線の普通列車で 1 時間 20 分ほどで「ラヴェンナ駅」に着きます。今はあまり大きな都市ではありません。海岸線まではかなりの距離（5km）があり港湾都市でもありません。ビザンチン様式の教会のあるところまでは駅前の広い通りを歩いていきます。日本人には観光地としてのラヴェンナの情報は余り入ってはきません。古代ローマ帝国とルネサンスの間にあって栄えた都市のため、日本人の観光ルートからは少し外れるようです。

現在ラヴェンナには「初期キリスト教建築群」としてユネスコの世界遺産に登録されている教会が沢山あります。特にモザイクの壁画が見事です。



どのような歴史があったのでしょうか。また初期キリスト教といわれる美術や建築の特色は何なのでしょうか。

ラヴェンナで出会った息をのむような美しいモザイクを紹介し、帰国して調べた「ラヴェンナの歴史」を報告します。

1) ラヴェンナの歴史

古代においてはラヴェンナ一帯はアドリア海に面していたそうです。最初に住みついたのはエトル

リア人、イタリア半島中央部のエトルリア人がアペニン山脈を越えてポー川やアドリア海沿岸にも都市をつくったそうです。ケルト人の攻撃なども受け、エトルリア人系の都市は勢力を失い、前2世紀にはローマの支配下にはいりました。ギリシャ半島にも近く、政治的に重要な地点でアウグストスの時代にローマ帝国の東地中海艦隊の基地が置かれました。東方との交易にとっても重要な都市でした。ヴェネチアはまだ存在すらしなかった頃のことです。

北からのゲルマン諸部族の南下により統一を維持できなくなったローマ帝国は4世紀末（395年）に二分されます。東のコンスタンチノープルは新しい首都として安定しますが、西の皇帝ホノリウスは首都ローマを維持できなくなり最初はミラノに、その後ラヴェンナに帝国首都を移しました。それによってこの市は5世紀から8世紀まで政治的にもキリスト教にとってもローマに次ぐ重要な都市になりました。

イタリア半島には西ゴート族、フン族、ヴァンダル族などの諸族が南下し、ローマ市は占領され、破壊されていきます。ヴァンダルを排撃したローマ軍隊の将軍の息子が皇帝ロムルスとして即位しますが、彼は476年にゲルマン系の傭兵隊長オドアケルによって廃位されました。ただオドアケルは自分が皇帝を名乗ることはなく東ローマ帝国ゼノン帝を皇帝としてその権威を認め、自分はパトリキエを称しイタリア半島を統治しようとした。

しかし、ゼノン帝は親ローマ的な東ゴート族の王テオドリクにイタリアを制圧させました。テオドリクは青年時代はコンスタンチノポリスで、ローマ人としての教育を受けて育っていました。彼は王位を継ぐとオドアケルと戦い、オドアケルが暗殺されるとイタリア半島は東ゴート族のテオドリクの王国となります。王国支配の中心は前代を引き継いでラヴェンナでした。

6世紀に入り、ユスチニアヌス帝（527年～565年在）の時代に東ローマ帝国の勢力が強くなるとラヴェンナへの攻撃が始まり、540年にテオドリクの王国は滅ぼされ、イタリア半島やアフリカ北岸地域は東ローマ帝国の支配になりました。ラヴェンナには総督が派遣されイタリアを統治しました。6世紀後半になるとイタリア半島北部に新たにゲルマン系ランゴバルド族が大挙して南下してきましたが東ローマ帝国はラヴェンナ総督管区を中心になんとかイタリア半島を死守しました。

しかし、パヴィアを中心にイタリア北部に王国をつくったランゴバルド族勢力は東ローマ帝国の勢力が弱まると南下政策を強化し、751年にラヴェンナも占拠されました。

ここで教皇ステファヌス2世がフランク王国のピピンに救援を仰ぎ、ピピンは遠征してラヴェンナやアドリア海沿岸の諸都市をランゴバルドから奪って教皇に寄進したのです。ランゴバルド勢力は774年にフランク王国カール大帝によってこの地から一

掃されました。

2) ラヴェンナの教会建築群

5世紀から8世紀までラヴェンナの歴史は次のように分けて考えられます。そして、ラヴェンナの複雑な歴史とその影響下にある建築・美術の代表例が次の世界遺産です。

①西ローマ帝国の首都の時代

ガッラ・ブラチーディア廟

②東ゴート・テオドリクス王の時代

サンタポリナーレ・ヌオーヴォ聖堂

③ユスティニアヌス帝によるビザンチン化時代

聖ヴィターレ聖堂

① 西ローマ帝国の首都の時代

この時代の建築は殆ど残っていませんが、ガッラ・ブラチーディア廟は外見のそっけなさに比べ中に入るとその見事なモザイクの天井に圧倒される素晴らしい遺産です。

ガッラ・ブラチーディアはキリスト教をローマ帝国の国教とした皇帝テオドシウス1世の娘としてローマに生まれ、帝国二分後に西の皇帝となっ

た兄と共に首都となったラヴェンナに移住しました。移住直後、ラヴェンナは西ゴート族の攻撃を受け、彼女は西ゴート王アラリクスに拉致され南イタリアに連れていかれましたが、幸いに相手が亡く



なりラヴェンナに戻りました。そこで皇帝コンスタンティウス3世と結婚し、二人の子供を産みますが兄の怒りにふれ今度はコンスタンチノポリスに追放されました。兄の死後ラヴェンナに戻り、息子が西ローマ皇帝になると、幼い皇帝を彼女が摂政として助けます。権力闘争の故か最後は母子ともローマにあって、彼女は450年に亡くなりました。西ローマ帝国末期にあって大変数奇な人生を送った女性であり、彼女の顔を鋳造した金貨も残っているといひます。ラヴェンナで彼女



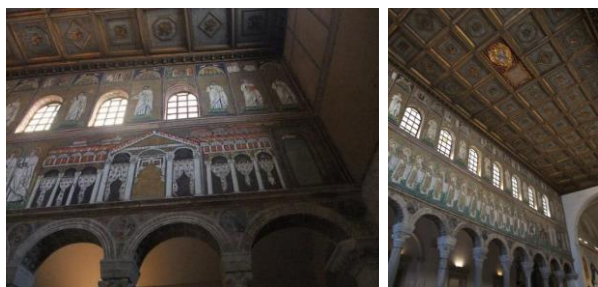
女の建てた聖堂などは当時の建物は残っていませんが、サンタ・クロッチェ聖堂に付属していた小礼拝堂がガッラの遺体が埋葬されたといわれる霊廟として残っています。ここの中には3つの棺がありますが、ローマで亡くなったガッラの遺体は無く、夫と息子である二人の皇帝の遺体が納められています。

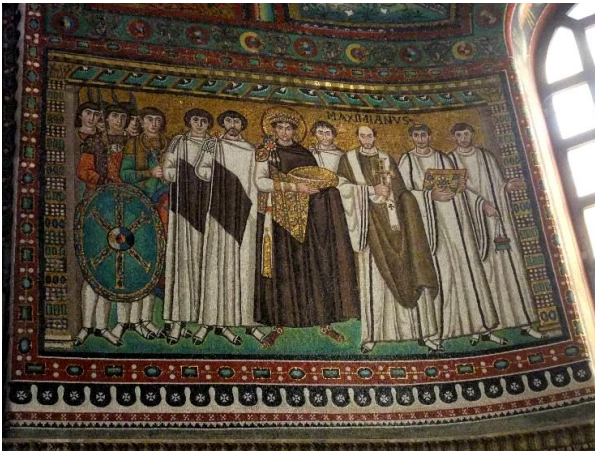
建物の外観は質素ですが、内部の藍色の天井には中心に金色の十字架、その周りには99個といわれる金色の★がちりばめられています。天井の四隅には4人の福音記者マルコ、ルカ、ヨハネ、マタイがそれぞれを象徴するライオン、牡牛、鷲、天使であらわされています。これが初期キリスト教美術に頻繁にあらわれる図像であるといひます。天井の周囲の4つの小さな天井にも星型の模様が様々な色合いで散りばめられ本当に美しい空間です。入口の上には＜羊飼いとすのイエス＞が金色の衣を付け、金色の後光が頭上に輝き、金色の

十字架状の杖をもっているモザイクがあります。これは＜聖性を帯びた羊飼いの絵＞として極めて貴重であるといひます。

② 東ゴート・テオドリクス王の時代

ラヴェンナが東ゴートのテオドリクス王の支配を受けていたというのも新たに知った事実ですが、その時代の建造物が5つも残っているというのも驚きでした。ラヴェンナの司教たちの専用の礼拝堂と関係する法具のある司教館、テオドリクスが





自らつくらせた霊廟などがありますが、最も見事なのはテオドリクスが造らせたという「サンタポリナーレ・ヌオーヴォ聖堂」で、王の宮廷付属聖堂です。

イエスに捧げられた聖堂、更に異教徒への伝道に尽くした司教へ捧げた聖堂などの謂われを持つ建物です。聖堂内部は長方形のバジリカ形式で左右 12 本ずつのギリシャ産大理石の柱で区分けされています。その列柱の上部には三段に分かれて全面にモザイクが施されています。三段目には多くの人物像が並んでいます。正面に向かって左側には 22 人の聖処女の姿、右側には 26 人の男性の殉教者が並んでいる迫力はすごいものです。顔と体を正面にむけ、足は前方に進むかたちをとって描かれるのがビザンチン様式ということです。女性の服装は裾の部分が全て異なっています。彼女たちの名前も男性側の聖人の名前もついています。

実際に見た時にはただただ聖女・聖人のオンパレードに驚きました。このように沢山の人物が並ぶ壁画は本当に珍しい。テオドリクスという東ゴートの王様のセンスもたいしたものでもあります。因みに、テオドリクスはキリスト教徒であったが、先に伝道されたアリウス派を信仰していたといわれています。カソリックとの関係をどのように折り合っていたのか興味をひかれました。

③ユスティニアヌス帝によるビザンチン化時代

いよいよユスティニアヌス帝の時代です。

「聖ヴィターレ聖堂」の名勝の由来は、ラヴェ

ンナで殉教死したローマの兵士で、この都市の守護聖人の名をとっているそうです。



中に入ると壁面は一面モザイク、少し奥に入るとアプシスがありキリスト像が描かれています。

左壁面に紫色のマントのような衣類（紫は皇族の色）を着たユスチニアヌス帝を中心に聖職者や軍人、護衛の兵士らがモザイクで造られている有名な壁画がありました。「本物に出逢えた……」と感慨にふけりました。

では、王妃テオドラのモザイクも？と反対側を見ると……ありました。中央にテオドラ、そして美しい衣装をつけた侍女たちがいて、聖職者に導かれてどこかにいくところらしい構図でした。このように威厳があって美しい女性だったのだろうなどしばし思いを馳せました。

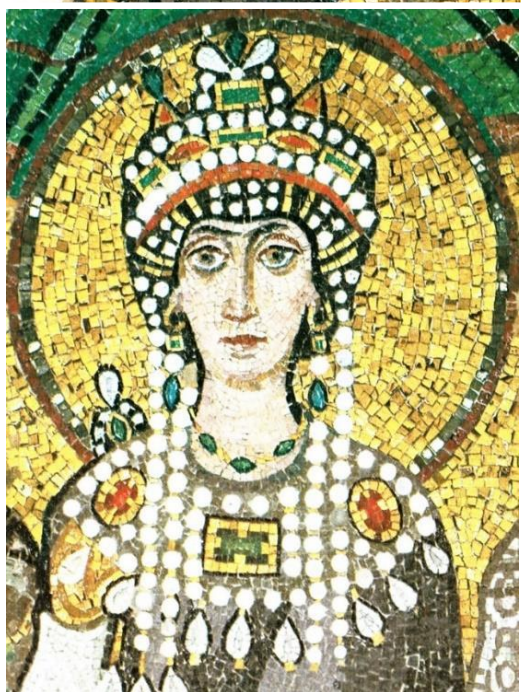
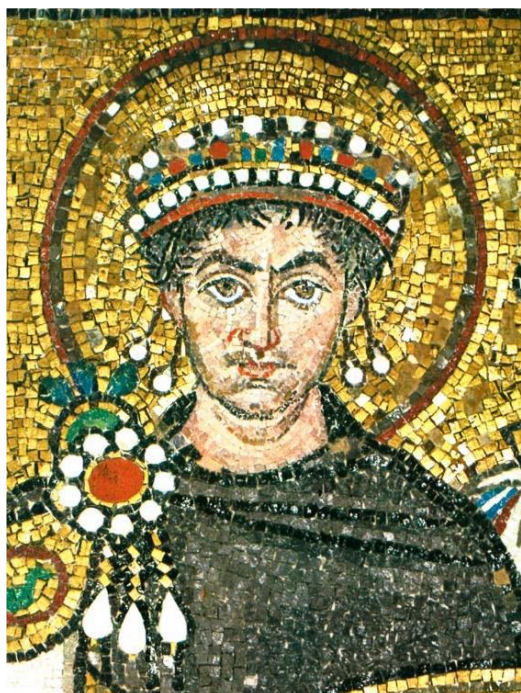
皇帝と后妃は実際にはラヴェンナには来たことがなかったといいますが、当時の職人や画家たちが輝かしい威厳をもった皇帝・后妃として全力投球して製作したのでしょう。実に見事なモザイクでした。堂々としたお二人の姿は黄金に輝いています。

これらを自由に写真に撮らせてくれるサービスの良さに感動しました。

3) モザイクとは

モザイクは、漆喰に石やガラスの粒（テッセラ）を埋め込んで絵や文様を描く技法です。

テッセラには各種の色の石やガラスが用いられ、数ミリ角から1センチ角の立方体に割って使われました。耐久性があり、石やガラスは色があせる



ことがなく、水をかけると更に鮮やかになります。

古代メソポタミア文明の発生の頃からモザイクによる装飾品が造られていたといわれます。今春、大英博物館から日本にやってきた「ウルのスタンダード」に最古のモザイクがありました。これは貴金属・宝石で作られていますが、特に古代ローマでは、床の装飾として広くつかわれました。ローマ遺跡には様々な絵柄のモザイクの床が見られます。広い帝国各地で共通の絵柄があることなど興味が尽きません。ビザンチンモザイクの特徴はガラスが多く使われるようになったことだといわれます。ズマルトというモザイク用に焼かれた多くの色ガラスと金箔をガラス板に焼き付けたもの（ガラスがまだ熱く柔らかいうちに金箔を付着させる）が使われ、教会堂、洗礼堂、廟などの装飾に多用されました。特に金色は荘厳さを演出し、差し込む陽の光の角度により輝きが移動し、映像的な美しさを生み出し、独特の宗教的な雰囲気をつくりだしました。

5～6世紀にかけてコンスタンチノーブルやラヴェンナで造られたモザイクがそのはじまりだといわれます。のちの時代のヴェネチア、サンマルコ寺院の輝くモザイク、またシチリア島に多くある教会建築などの美しさは黄金色にあるのだということもわかりました。

西ヨーロッパでは広まらなかったということですが、原料の問題なのか、技術の問題なのかかわかりません。モザイクはその製作に気の遠くなるような時間と労苦を伴います。よほどの宗教性がないと出来ない技なのではないでしょうか。

ラヴェンナのモザイク壁画は初期キリスト教時代の、ビザンチンモザイクの宝庫でした。

*友の会ホームページではカラーで見ることができます。

都歴研友の会ホームページ

<http://sky.geocities.jp/torekikentomonokai>

友の会の諸連絡、国内・海外研修旅行の記録、
「友の会だより」バックナンバーもカラーで。

被災地訪問の旅

豊田岩男

昨年は、2度、被災地を訪れる機会があった。
8/31～9/2（二泊三日）と 11/16～11/17（一泊二日）との2回である。2ヶ月半の間に陸前高田の埋め立て・嵩上げ工事がだいぶ進んでいることに驚いた。

大規模な工事で復興

2014. 8/31

武蔵境駅近くに集合し、都立高校社会科OB6人とH氏子息の学生1人の7人で、8人乗りのバンで出発した。その中の会員は、池口、長谷川、豊田の3人であった。常磐道を北上し、塩谷岬の灯台に登り福島的第一原発方面を遠望した。当時としては立ち入り制限区域となっている富岡町まで行き、被災したまま取り残されている駅や街並みを見て歩いた。

常磐道をそのまま北へ行くことは出来なくて、その日は内陸部の土湯温泉に泊まった。

2014. 9/1

浜通りの相馬市に向かい、被災した山元町立中浜小学校の校舎を見た。以後、常磐道を北上し、閑止地区を経て石巻から女川まで直行した。沿道は津波に被災した地域であり、被災時から約3年半経っているため、瓦礫は取り除かれていたが、住居跡や田畑は夏草に覆われており、一面の草原となっていた。女川では、4階建ての共催会館ビルが基礎部分ごと横倒しになって放置されており（写真）、津波の威力を物語っていた。ここでは、東北電力女川原子力発電所を見学した後、南三陸のホテル「観洋」に、暗くなってから到着した。

2014. 9/2

南三陸町の中心地の志津川へ向かう。ここへは、11月に再度、訪問することになる。平坦な部分があるため、全面的に津波に襲われることとなった。



三階立ての防災対策庁舎は、赤い鉄骨だけの姿で残されていた。この建造物は震災の遺構として残すべきか否かは議論があり、最近、宮城県が買い取り、とにかく、30年間は残しておき、その間様子を見ることになったらしい。この建物の二階の防災無線室は、南三陸町危機管理課職員として遠藤未希さんが、津波に飲み込まれる直前まで、高台へ避難を呼びかけていたところであった。しかし、津波はこの建物の屋上の2メートル上にまで達し、ここに避難していた人々を飲み込み浚っていったのであった。

気仙沼市を経て、最も大規模な施設を構築して復興に取り組んでいる陸前高田市に入った。山の部分と平地とをベルトコンベアーで結び、山を削り海よりの平坦部を嵩上げしていた。国道脇にあった道の駅「タビック」が被災したまま残されており、松の木の残骸も引っかかっている、被災以前には海岸線に美しい松林があったことを忍ばせていた。

三陸縦貫道路を北上し、今回最後の訪問地、大船渡市北方の吉浜地区に入った。この地域には、倒壊家屋4棟、行方不明1名を出したのみの中浜地区があり、この地はかつて、1896年と1933年の2回にわたり、大津波被災時に当時の村長が私財を投じて高台移転を果たした所であった。

帰りは、一関インターから東北道を6時間掛けて東京に戻ってきた。

民宿「未希の家」に宿泊

2014. 11/16

高校教員OB6人で、被災地を訪ねた。内会員は私1人のみである。新幹線駅の一関に集合して、

そこからレンタカーを借りて出発した。一関の知人宅を訪問した後、南三陸町を目指した。志津川の地を2ヶ月半ぶりに再び訪れ、三階建ての鉄骨だけの防災対策庁舎前で手を合わせた。ここは、2011年3月11日に南三陸町危機管理課職員の遠藤未希さんが「急いで高台に避難してください」と呼びかけ続けたところであった。

その日の夜は、民宿「未希の家」に宿泊した。娘を亡くした喪失感に悩まされながらも、津波の恐ろしさを語り継ぐため、母の遠藤美恵子さんが2014年7月にオープンした家であった。

その民宿での夕食時に、震災前夜、カラスがいやに騒いだことや震災前の浜一帯ではワカメ漁が2シーズン豊漁だと家が建ったり、新車を買えたりする景気の良い話があちこちに持ち上がっていたというお話を聞いた。

宿泊した「未希の家」が建っている約10メートル下に遠藤さんの母屋があり、その前庭まで津波が押し寄せて来たとのことであった。

2014.11/17

南三陸町の志津川を出発して、一路、陸前高田市を目指し北上した。その日のうちに平泉の中尊寺にも立ち寄る予定のため先を急いだ。高田に到着して目にとまったのは、前回来たときには稼動していたベルトコンベアーが静止しており、嵩上げ工事がかなり進んでいることであった。奇跡の一本松も再現されており、その根本まで行かれる道が作られており、多くの人々がここを訪れていた。この後、高田市を離れ、内陸部の平泉を訪れ、一関でレンタカーを返却し、新幹線で東京に戻った。

会員の著書紹介

多田統一編著

『日本の研究博物館・資料館』

リーブルテック 2015

月刊「文芸広場」の取材で訪ねた10の博物館・資料館を紹介したものである。東京大学総合研究博物館を筆頭に、東京農工大学繊維博物館（現科

学博物館）、東京海洋大学水産資料館など、ユニークな所もある。これらの博物館・資料館は、大学等の研究機関が運営しているため、先端的な学術研究と標本の保存公開という性格を併せ持っている。活動の状況についてまとめたが、経営上の問題や学校教育・社会教育との連携についても触れた。（多田統一）

小島日記研究会編

『梧山堂雑書 14（文久3年）』

武蔵国多摩郡小野路村（現町田市）の名主をつとめた小島家に、天保7年から大正10年までの86年間にわたって書き継がれてきた名主日記がある。解読を進めてきた小島日記研究会（会長 重政文三郎）は、小島角左衛門が書いた日記のうち文久3年（1863）分を、『梧山堂雑書』として刊行した。

文久3年という年は、攘夷の実行として長州藩が下関海峡で外国船を砲撃し、また、生麦事件への報復として薩英戦争が起こり、そして京都では新選組結成や8月18日の政変が起こるなど、幕末の激動が始まった年である。その歴史的な動きを多摩の村ではどのように受け止めていたか、名主の日々の日記が書き遺して興味尽きない。

なお、出版とあわせて原本史料がインターネットで公開され、世界中で自由に読むことができるようになった。

■『梧山堂雑書 14』は税込1600円、注文は小島資料館 〒194-0064 町田市小野路町950

■インターネットで見るとは

「adeac」で検索。「歴史資料検索閲覧システム」を開くと、小島資料館の史資料が見られる。原本史料と解読文を併せて読むことができる。

（重政文三郎）



都歴研友の会 2015 年度史跡見学旅行へのお誘い

台密と東密の歴史、湖北の風土と惣村

実施日：2015（平成 27）年

11 月 16 日（月）～18 日（水）

テーマ：台密と東密の歴史、湖北の風土と惣村

ポイント：

- ① 平安京遺構の東寺境内を見学し、空海が築いた東密の世界を考えます。
- ② 比叡山三塔（東塔・西塔・横川）を回り、最澄の学びと台密の世界を考えます。
- ③ 中世の自治村である惣として名高い菅浦を歩き、湖北の歴史に想いを馳せます。

旅 程：

- 1 日目 12:00 京都駅八条口集合（徒歩 15 分）綜芸種智院跡→東寺慶賀門→東大門→五重塔→金堂→講堂→灌頂院→鎮守八幡宮→南大門→大師堂→宝物館（徒歩 15 分）京都駅（湖西線）近江舞子駅（送迎バス）宿舎「未来館」（もと国民宿舎 現民営）
- 2 日目 近江舞子駅→比叡山坂本駅→バス・ケーブルで比叡山へ→横川（横川中堂等）→峰道で昼食→西塔（にない堂・浄土院等）→東塔（根本中堂・戒壇院等）→ケーブル・バスで坂本→比叡山坂本駅（湖西線）永原駅（送迎バス）宿舎「つづらお」（もと国民宿舎 現民営）
- 3 日目 荷物を宿舎に預けて菅浦見学→西門→須

賀神社→菅浦史料館→阿弥陀寺→東門→宿舎に
戻り昼食→送迎バスで永原駅（ここで離脱も可）
→近江塩津駅→米原駅（15：30 解散予定）

宿泊：2 人部屋または 3 人部屋（特に同室希望の方
は申し込みの際にお申し出ください。）

集合まで：切符は各自、事前に、行き：出発地（東
京など）→京都駅 帰り：京都→湖西線經由→
近江塩津駅→北陸本線經由→米原駅→到着（東
京など）を買っておく。詳細は事前案内にて。

参加費：26,000 円

2 泊 6 食（昼食 2 回）付、現地の交通費（集合
～解散の JR・バス・ケーブル）、拝観料等含む

募集人員：15 人程度（先着順）

申し込み：下記要領で、7 月末日〆切

詳細案内送付：2015 年 10 月上旬

参加費支払：10 月末迄に振込（詳細は事前案内）

申し込み先 小澤拓美

189-0026 東村山市多摩湖町 4-1 4-1 3

FAX 042-391-9500

（送り状不要、下記事項記入し送付）

E メール oz22@oregano.ocn.ne.jp

2015 年史跡見学旅行（東寺・比叡山・菅浦）
申し込み用紙

氏 名 _____
郵便番号 _____
住 所 _____
自宅電話 _____
携 帯（あれば） _____
E メール（あれば） _____
食事アレルギー（あれば） _____
同室希望者（あれば） _____
その他連絡事項 _____

友の会だよりへ投稿のお願い

例年同様 7 月中には発行します。以下の要領で会員の
皆様の玉稿をいただければ幸いです。

内 容：研究要旨、資料紹介、書評、紀行文等何でも。

字 数：2000 字～3000 字

著作を刊行された場合には書籍そのもの、または要旨
をお送り下さい。紙上でご紹介します。

送付先：〒191-0033 日野市百草 9 7 1-1 5 8 増田方
東京都歴史教育研究会友の会事務局



東京都歴史教育研究会友の会は、6月20日（土）都立三鷹中等教育学校を会場として、第9回総会を開催しました。

総会議事は、世話人代表挨拶から始まって、第1号議案から順次審議を進めました。

① 事業報告

事業報告としては増田克彦世話人代表から、友の会独自企画である第4回目の海外研修「スペイン」の実施が報告されたほか、都歴研の講演会、研究大会および見学会等への会員の参加促進と参加状況などが報告されました。

次に、友の会の会員状況について、2014年度中では新規会員が2名ありましたが、樋口秀司さんの逝去、その他退会希望者2名があり、今年度会員数は57名でスタートとなったことが報告されました。

② 決算報告

矢島恒之会計担当から、会費納入53名のほか、寄付をしていただいた方4名があり、予算額をこなせるだけの収入があったことが報告されました。その一方、会費納入について長期未納の会員3名を含め、今年度未納者への督促をしようということになりました。

昨年度から都歴研援助金を停止し、かわりに「友の会歴史教育研究助成制度」（本号23ページ参照）を新設しましたが、これは、全歴研への東京からの研究発表者について研究費を助成するものです。しかし、昨年のお阪大会では東京からの研究発表者がなかったために対象者なしとなりました。

③ 世話人選出

今年度の世話人は引き続きつぎの11名にお願いすることとなりました。

磯山進、小澤拓美、木村清治、黒田比佐雄、鍵

東京都歴史教育研究会友の会2015（平成27）年度予算

	項 目	予 算	前年度	備 考
収入の部	会 費	116000	120000	会員58名×2000円
	寄付金・他	5000	5000	
	前年度繰越金	338577	266142	
	計	459577	391142	

支出の部	歴史教育研究助成金	50000	50000	全歴研大会発表者への研究助成
	会報印刷費	50000	0	友の会だよりの印刷費等
	通信輸送費	80000	60000	総会案内、友の会便り等送付
	事 務 費	10000	10000	封筒その他
	会 議 費	20000	20000	会議室会場費
	研修旅行補助費	20000	20000	研修旅行事前準備、資料作成費など
	ホームページ作成・維持費	20000	20000	友の会のホームページ維持にかかわる費用
	予 備 費	209577	211142	
	計	459577	391142	

会費前納金報告

		人 数	金 額	備 考
内訳	2015年度分	27	54000	
	2016年度分	14	28000	
	2017年度以降	1	2000	
計		42	84000	

山充尚、重政文三郎、多田統一、豊田岩男、増田克彦、村木逸子、矢島恒之

④ 事業計画

今年度は友の会独自企画として国内の研修旅行を実施しますが、小澤拓美研修担当の企画で、「台密と東密の歴史、湖北の風土と惣村」をテーマに、11月16日（月）から18日（水）の計画が承認されました。次に、新規事業として「友の会歴史教育研究助成制度」が始まっていますが、今年度は全歴研東京大会において、グループ研究を含めて多数の研究発表が予定されているので、大会を期に助成をしていくことが確認されました。

⑤ 2015年度予算

「友の会だより」の印刷所変更に伴う費用の増加、メール便業者撤退に伴う郵送費の増加など予算の増額が必要となり、それらをふまえた予算案（別掲）が提案され了承されました。

⑥ その他

会員への通信方法として電子メールなどを利用することの可能性を探るべきだとの意見があり議論されました。

都歴研友の会ホームページ

<http://sky.geocities.jp/torekikentomonokai>

友の会の諸連絡、国内・海外研修旅行の記録、「友の会だより」バックナンバーもカラーで。